

[A年]公現後第5主日(2021年2月7日)

【旧約聖書日課】列王記下5章1~14 (15~19) 節

1アラムの王の軍司令官ナアマンは、主君に重んじられ、気に入られていた。主がかつて彼を用いてアラムに勝利を与えられたからである。この人は勇士であったが、重い皮膚病を患っていた。2アラム人がかつて部隊を編成して出動したとき、彼らはイスラエルの地から一人の少女を捕虜として連れて来て、ナアマンの妻の召し使いにしていた。3少女は女主人に言った。「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえますように。」4ナアマンが主君のもとに行き、「イスラエルの地から来た娘がこのようなことを言っています」と伝えると、5アラムの王は言った。「行くがよい。わたしもイスラエルの王に手紙を送ろう。」こうしてナアマンは銀十キカル、金六千シケル、着替えの服十着を携えて出かけた。6彼はイスラエルの王に手紙を持って行った。そこには、こうしたためられていた。

「今、この手紙をお届けするとともに、家臣ナアマンを送り、あなたに託します。彼の重い皮膚病をいやしてくださいますように。」7イスラエルの王はこの手紙を読むと、衣を裂いて言った。「わたしが人を殺したり生かしたりする神だとしても言うのか。この人は皮膚病の男を送りつけていやせと言う。よく考えてみよ。彼はわたしに言いがかりをつけようとしているのだ。」

8神の人エリシャはイスラエルの王が衣を裂いたことを聞き、王のもとに人を遣わして言った。「なぜあなたは衣を裂いたりしたのですか。その男をわたしのところによこしてください。彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」

9ナアマンは数頭の馬と共に戦車に乗ってエリシャの家に来て、その入り口に立った。10エリシャは使いの者をやってこう言わせた。「ヨルダン川に行つて七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」11ナアマンは怒ってそこを去り、こう言った。「彼が自ら出て来て、わたしの前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病をいやしてくれるものと思っていた。」12イスラエルのどの流れの水よりもダマスコの川アバナやバルバルの方が良いではないか。これらの川で洗って清くなれないというのか。13彼は身を翻して、憤慨しながら去って行った。14しかし、彼の家来たちが近づいて来ていさめた。「わが父よ、あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそれとおりになされたにちがひありません。あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか。」14ナアマンは神の人の言葉とおりに下って行って、ヨルダンに七度身を浸した。彼の体は元に戻り、小さい子供の体のようになり、清くなった。

15彼は随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立った。「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。今この僕からの贈り物をお受け取りください。」16神の人は、「わたしの仕えている主は生きておられる。わたしは受け取らない」と辞退した。ナアマンは彼に強いて受け取らせようとしたが、彼は断った。17ナアマンは言った。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこの僕にください。僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることにはしません。18ただし、この事については主が僕を救ってくださいますように。わたしの主君がリモンの神殿に行つてひれ伏すとき、わたしは介添えをさせられます。そのとき、わたしもリモンの神殿でひれ伏さねばなりません。

わたしがリモンの神殿でひれ伏すとき、主がその事についてこの僕を救ってくださいますように。」19エリシャは彼に、「安心して行きなさい」と言った。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙二12章1~10節

1わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。2わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じます。3わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じます。4彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。5このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。6仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかも知れない。7また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。8この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。9すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に發揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

【福音書日課】マタイによる福音書15章21~31節

21イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。22すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。23しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」24イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにか遣わされていない」とお答えになった。25しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。26イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやっちはいけぬ」とお答えになると、27女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」28そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたを願ひにおりになるように。」そのとき、娘の病氣はいやされた。

29イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。30大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。31群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記下5章1~14 (15~19) 節

¹アラムの王の將軍ナアマンは、主君に重んじられ、氣に入られていた。主が彼によってアラムに勝利を与えられたからである。ただ、この人は力ある勇士であったが、規定の病を患っていた。

²かつてアラムは部隊(別訳→略奪隊)を組んで出撃したとき、イスラエルの地から一人の少女を捕虜として連れて来た。彼女はナアマンの妻に仕えていたが、³あるとき、女主人にこう言った。「ああ、ご主人様がサマリアにいる預言者のところにお出でになれば、その規定の病を癒してもらえますように。」⁴そこで、ナアマンは主君のもとに行って、「イスラエルの地から来た若い女が、このようなことを申しております」と伝えた。

⁵アラムの王は、「行って来なさい。私もイスラエルの王に手紙を送ろう」と答えた。ナアマンは、銀十キカル、金六千シェケル、着替え十着を手にして出かけた。⁶彼はイスラエルの王への次のような手紙を携えて行った。「さて、この手紙をお手元に届けますと同時に、家臣ナアマンを御前に遣わします。彼の規定の病を癒してくださいますように。」⁷イスラエルの王はこの手紙を読むや、衣を引き裂いて言った。「私は、人を殺したり生かしたりする神なのか。この者は、私に規定の病の生を癒せと送って来ている。だが、よく考えてみよ。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ。」

⁸神の人エリシャは、イスラエルの王が衣を引き裂いたことを聞くと、王に人を送って言った。「なぜ、あなたは衣を引き裂いたりしたのですか。その男を私のところによこしてください。そうすれば、イスラエルに預言者がいることが分かるでしょう。」⁹ナアマンは馬と戦車でやって来て、エリシャの家の戸口に現れた。¹⁰エリシャは、使いの者をやって、「ヨルダン川に行って、七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなるでしょう」と言わせた。¹¹ところが、ナアマンは怒って立ち去り、こう言った。「私は、彼が自ら出て来て私の前に現れ、彼の神、主の名を呼んで、患部に手をかざし、病を癒すものばかり思っていたのだ。」¹²ダマスコの川であるアパナやバルバルのほうか、イスラエルのどんな水よりも良いではないか。それなのに、これらの川で洗っても、清くなれないというのか。」ナアマンは身を翻して、憤って立ち去った。¹³しかし、家臣たちがそばに来て進言した。「ご主君(直訳→わが父)、あの預言者が大それたことを命じたとしても、あなたはきっとそれをなさったことでしょう。ましてあの方は、『身を洗って清くなれ』と言っただけではありませんか。」¹⁴そこで、ナアマンは下って行って、神の人の言葉どおり、ヨルダンに七度身を浸した。すると、その体は、少年の体のように清くなった。

¹⁵ナアマンは、陣営の皆と一緒に神の人のところに戻り、その前に現れて言った。「イスラエルのほか、全地のどこにも神はおられないということが分かりました。さあどうか、僕からの贈り物をお受け取りください。」

¹⁶しかし、神の人は、「私が仕える主は生きておられる。私は受け取りません」と答えた。ナアマンはしきりに受け取らせようとしたが、エリシャは断った。¹⁷そこで、ナアマンは言った。「それでは、どうか僕に二頭のろばに載せるほどの土をください。僕は、主以外のほかの神々には、もはや焼き尽くすいけにえや会食のいけにえを献げることはいたしません。¹⁸ただ、次のことについては、お教しくさせていただきますように。私の主君が、礼拝を

するためにリモンの神殿に入るとき、私の介添えが必要となるため、私もリモンの神殿で礼拝します。私がリモンの神殿で礼拝するとき、主がこのことについて、僕をお教しくくださいますように。」¹⁹エリシャがナアマンに、「安心して行きなさい」と言ったので、ナアマンは彼と別れて、少し道を進んだ。

コリントの信徒への手紙二12章1~10節

¹私は誇らずにいられます。誇っても無益ですが、主の幻と啓示とについて語りましょう。²私は、キリストにある一人の人を知っています。その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体の外に出でかは知りません。神がご存じです。³私はそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。⁴その人は樂園にまで引き上げられ、人が口にすることを許されない、言い表しえない言葉を聞いたのです。⁵このような人のことを私は誇りましょう。しかし、私自身については、弱さ以外は誇るつもりはありません。⁶もともと、私が誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。しかし、誇るのはやめましょう。私について見たり、聞いたりする以上に、私を買いかぶる人がいるかもしれないからです。⁷また、あまりに多くの啓示を受けたため、それで思い上がることのないようにと、私の体に一つの棘が与えられました。それは、思い上がらないように、私を打つために、サタンから送られた使いです。⁸この使いについて、離れ去らせてくださるよう、私は三度主に願いました。⁹ところが主は、「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全されるのだ」と言われました。だから、キリストの力が私に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。¹⁰それゆえ、私は弱さ、侮辱、困窮、迫害、行き詰まりの中にあっても、キリストのために喜んでいきます。なぜなら、私は、弱いときにこそ強いからです。

マタイによる福音書15章21~31節

²¹イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に退かれた。²²すると、この地方に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。²³しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながら付いて来ます。」²⁴イエスは、「私は、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。²⁵しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、私をお助けください」と言った。²⁶イエスが、「子どもたちのパンを取って、小犬たち投げてやるのはよくない」とお答えになると、²⁷女は言った。「主よ、ごもつともです。でも、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」²⁸そこで、イエスはお答えになった。「女よ、あなたの信仰は立派だ(直訳→大きい)。あなたの願いどおりになるように。」その時、娘の病氣は癒された。

²⁹イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行き、それから、山に登って座っておられた。³⁰大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、手の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足元に置いたので、イエスはこれらの人々を癒された。³¹群衆は、口の利けない人がものを言い、手の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を崇めた。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・2月7日「公現後第5主日(降誕節第7主日)」の日課主題は「いやすキリスト」。主イエスの公生涯の活動は一般に、「御言葉の教え(ディダケー)」、「神の国の宣教(ケリュグマ)」、「病の癒し(セラペイア)」の三つに集約されると説明される。これらは、主イエスに固有の(ユニークな)ものであるというよりは、旧約の「預言者」伝承の系譜に位置づけられる。

・「病氣治癒」を神的(靈的・超自然的)力によって行うことは、「聖書」においてはもっぱら、真の神への信仰に基礎づけられたこととして描かれる。旧約でも新約でも描かれる異教の「魔術師」は、自然現象を操る「魔力」を司る者として登場しても、通常、「病氣」を治癒したり「死者」をよみがえらせたりすることはできない。「聖書」全般が、真の神に固有の特別なこととして「身体」や「命」そのものを支配する方と理解している。

・キリスト教会の歴史では、後に「聖人」とされるようになる信仰者によって行われた病氣治癒や死者のよみがえりの奇跡伝承が少なくない。実際に起こったことが何であれ、その出来事を経験した人々が、治癒をもたらした信仰者を通して、「命の支配者たる神」への信仰を深めたという共同体験が起こったのであろう。

・現代キリスト教会でも、聖霊派(カリスマ派)やホーリネス派(清め派)において「神癒」が信仰上の核心的出来事として重要視されている。

旧約日課(列王記下5章より)

・「列王記」上下は、元来、上下巻で一巻物の文書であるが、「サムエル記」上下と密接に結びつけられて編纂された文書でもあり、旧約正典の「律法と預言者」が編纂されるに際して、「前の預言者」(「ヨシュア記」から「列王記」まで)のまとまりを前提とした最終的な編集作業によって現在の文書が整えられた。

・日課箇所は、上巻17章から始まった「エリヤ物語」を継承する形で描かれる「エリシャ物語」の中で「ナアマンの癒し」として知られる逸話の一部である。背景には、紀元前11世紀ごろから成立していたオリエント西方の小国家群が、断続的なアッシリア帝国の軍事遠征による圧迫を受けながら、相互に領土争い、利権争いを繰り返しているという時代状況があり、特に北王国イスラエルは隣国アラム(ダマスコ)との間に常に紛争事案を抱えていた。「エリヤ物語」と「エリシャ物語」の時代の王たちの物語も、終始、対アラム紛争に関連して描かれている(王上20章、22章、王下6~7章など)。日課箇所に登場する「ナアマン」は、「アラムの王の軍司令官」であり、イスラエルにとっては敵対関係にある国の軍事責任者である。そのような人物が、敵国の領域に在住する預言者を訪ねて病氣の癒しを求めるとするのは、これらの諸国が、完全な敵対関係にあったというよりは利害関係国同士であったということであり、ナアマンやアラム王の行動も何ら不思議な

ことではない。もちろん、そのような行動に対して疑心暗鬼で対応するイスラエル王の描写も、もっともなものである。

・「ナアマンの癒し」伝承は、しばしば、「旧約」の描く異邦人の信仰告白の代表例として取り上げられる。しかし、この伝承は「新約」でも引用されているが(ルカ4:27)、この引用は、神が「癒し」の御手を伸べられる優先順位がイスラエル・ユダヤ人優先であるわけではない、ということを示すためになされたものである。実のところ、「エリシャ物語」の伝える「預言者エリシャ」は、必ずしも「イスラエル専属の預言者」とは言えない可能性がある。エリシャは、サマリアのイスラエル王に対しても助言するが、ダマスコのアラム王のもとにも赴く(王下8:7以下)。このような立ち位置は、エリシャの師とされるエリヤに関連しても語られている(王上19:15以下)。エリヤがギレアドの人として描かれること(王上17:1)や、イスラエル王国とアラム王国が「ラモト・ギレアド」の帰属を巡って紛争していたとされる時代描写(王上22章)を考慮すれば、エリヤやエリシャの時代の「預言者」すなわち「祭司的権威を有する社会集団」が、諸王国から一定の独立を保った存在として諸国に影響力を行使する存在であった可能性が考えられるのである。そのような時代に活躍した「エリヤ」や「エリシャ」の伝承は、王国の記録として作成保存された「預言者〇〇の預言の書」とは異なる民間伝承として広く知られていた可能性があり、「列王記」編者は、そのような民間伝承をも用いて「エリシャ物語」を編じていると考えられる。

・「重い皮膚病」に関する規定は、「レビ記」(13~14章)にあるが、これは、「社会的に排除・疎外されるべき者の共同体への再加入規定」である。ナアマンの「沐浴」は、後年のユダヤ教における改宗者の改宗儀式(清めの沐浴≒洗礼)の根拠の一つとなっている。

使徒書日課(Ⅱコリント12章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、使徒パウロが創設に関わったコリント教会に宛てて送った一連の書簡の一つ。コリント教会宛の書簡は、「新約」正典中に二書含まれているが、両書簡の記述から他にも書き送った書簡があったことが分かる。パウロは、自ら創設に関わりながら、自分が離れた後のコリント教会で信仰生活のあり方に関わる党派争いが生じ、一部でパウロに対する批判も噴出していたことに対して、助言と自己弁明を目的に「手紙一」を送っているが、その後さらに深まったパウロとコリント教会の人びととの間の亀裂を修復することを願って「手紙二」を記したと考えられる。このような経緯から、「手紙二」では、パウロが自分自身の信仰者としての経験や思いを率直に語ることで理解を得ようとする記述が多くなっている。

・日課箇所は、パウロの「啓示体験の証し」として語られている。パウロの信仰体験は、「使徒言行録」で繰り返し描かれる「回心体験」が知られているが、日課箇所

所は、パウロ自身が語っているという点では、日課箇所
の記述がよりパウロの信仰形成を直截に示している
と言える。ここで繰り返されているように、パウロがキ
リストとの出会いで経験した体験の根底には、彼自身
の「誇り」意識の問題があったと考えられる。かつて自
分の持つ「強さ」を「誇り」として自己形成していたパ
ウロは、キリストとの出会いによって、その「誇り」を無
とするようなまったく異なる土台(キリストによって示され
た神の恵み)に拠って形成される自己(人間)のあり
方を知るように変えられた。同様の問題意識を示す記
述は、フィリピ 3 章にも見られる。

福音書日課(マタイ 15 章より)

・日課箇所は「カナン女の信仰」と見出しが付けら
れているが、「マルコ福音書」の並行箇所では「シリ
ア・フェニキアの女の信仰」と見出しが付けられている。
「ティルスとシドンの地方」は、現在のレバノンに属す
る地中海沿岸沿いで、古代世界では「フェニキア」と呼
ばれた地域で、彼らは「カナン人」を自称していた。
「旧約」で「カナン人」は「エジプト人」に近い民族とみ
なされる場合があるが、言語の面からみると、イスラエ
ル、アラムなどと同系の西方セム族で、イスラエル・ユ
ダの歴史においては非常に密接な関りを持ち続けて
いた。一方、「シリア」と呼ばれるのは、「旧約」で「アラ
ム」と認識される地方で、よりフェニキアより内陸部を
指すのが通例である。日課箇所、
「ティルスとシドンの地方」の女を「カナン女」と呼んで
いるのは、同地人の立場からすると、歴史的に正確である。
「ティルス」がイスラエル史上重要な意味を持ち始める
のは、ダビデが王となり、ティルスの王との間に交易外
交関係を持つようになってからである。ソロモン王の時
代にエルサレム神殿は、ティルスの王の莫大な援助によ
って建てられた。また、エリヤ物語に出てくる北王国
アハブ王は、シドンから王妃イゼベルを迎えている。

・ここで、主イエスの態度は異邦人に対して積極的
ではないが、このような逸話が伝えられたことによって、
初代教会は異邦人伝道に踏み出す根拠を得たと考
えられる。28 節「あなたの信仰は立派だ(大きい)」は、
14:31「信仰の薄い者よ」と対照的な表現。

来週の誕生日 (2月7日～13日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-356 番「インマヌエルの主イエスこそ」(= I 161)
は、作詞者アレンドルフは、18 世紀ドイツの牧師で、
敬虔派詩人として知られ、J.S. バッハと入れ違いに
ケーテン宮廷説教者としても務め『ケーテン讃美歌
集』を編纂。その中の一曲で、作曲者は不明。
- ・21-553 番「キリストがわけられた」(☐22 番)は、
Land of Rest の曲名で知られる米国の民謡曲に、
聖餐/愛餐に用いるための詞を讃美歌委員会が付し
たもの。米国では、この曲に「O Land of Rest」他さ
まざまな歌詞が付けられた讃美歌がみられる。

- ・21-77 番「パンくずさえ拾うにも」(= I 206「主のき
よきつくえより」)は、19 世紀英国の国教会司祭 E.
ビカーステスの作詞(同名の息子は宣教師として日
本聖公会設立に貢献)。曲は、英国教会のオルガニ
ストであったラングランの作曲で、元来は 21-218「日
暮れてやみはせまり」のために作られたもの。

21-356「インマヌエルの主イエスこそ」

Einer ist König, Immanuel sieget

1. Einer ist König, Immanuel sieget! / Bebet, ihr Feinde, und
gebet die Flucht! / Zion hingegen, sei innig vergnügt, /
labe dein Herze mit himmlischer Frucht! / Ewiges Leben,
unendlichen Frieden, / Freude die Fülle hat er uns
beschieden.
2. Stärket die Hände, ermuntert die Herzen, / trauet mit
Freuden dem ewgen Gott! / Jesus, die Liebe, versüßet die
Schmerzen, / reißet aus Ängsten, aus Jammer und Not. /
Ewig muß unsere Seele genesen / in dem holdseligsten
lieblichen Wesen.
3. Halte, o Seele, im Leiden fein stille, / schlage die Rute des
Vaters nicht aus; / bitte und schöpfe aus göttlicher Fülle
Kräfte, / zu siegen im Kampfe und Strauß! / Fluten der
Trübsal verrauschen, vergehen; / Jesus, der Treue, bleibt
ewig dir stehen.
4. Zion, wie lange hast du nun geweinet? / Auf und erhebe
dein sinkendes Haupt! / Siehe, die Sonne der Freuden
erscheinet / tausendmal heller, als du es geglaubt. / Jesus,
der lebet, die Liebe regieret, / die zu den Quellen des
Lebens dich führt.
5. Laufet nicht hin und her, eilet zur Quelle! / Jesus, der
bittet: "Kommt alle zu mir!" / Sehet, wie lieblich, wie lauter
und helle / fließen die Ströme des Lebens allhier! / Trinket
ihr Lieben, und werdet erquicket: / hier ist Erlösung für
alles, was drückt.
6. Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone, / die euch der
König des Himmels anbeut. / Selber der Herr wird den
Siegern zum Lohne; / wahrlich, dies Kleinod verlohnet den
Streit! / Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone: / selber
der Herr wird den Siegern zum Lohne.
7. O du Lamm Gottes, da, da wird man sehen / eine gewaltige,
siegende Schar / deine unendliche Hoheit erhöhen. / Alles,
was Odem hat, ruft: / Er ist's gar! Sehet, / wie Kronen und
Throne hinfallen; / höret, wie donnernde Stimmen
erschallen.
8. Reichtum, Kraft, Weisheit, Preis, Stärke, Lob, / Ehre Gott
und dem Lamme, dem Heiligen Geist! / Wenn ich da
stünde, o wenn ich da wäre! / Springet, ihr Bande, ihr
Feseln zerreißt! / Amen, die Liebe wird wahrlich erhören. /
Alles, was in mir ist, lobe den Herren!

21-77「パンくずさえ拾うにも」

Not Worthy, Lord, to Gather Up the Crumbs

1. Not worthy, Lord, to gather up the crumbs / With trembling
hand, that from thy table fall, / A weary, heavy-laden sinner
comes / To plead thy promise and obey thy call.
2. I am not worthy to be thought thy child, / Nor sit the last and
lowest at thy board; / Too long a wanderer and too oft
beguiled, / I only ask one reconciling word.
3. I hear thy voice; thou bidd'st me come and rest; / I come, I
kneel, I clasp thy pierced feet; / Thou bidd'st me take my
place, a welcome guest / Among thy saints, and of thy
banquet eat.
4. My praise can only breathe itself in prayer, / My prayer can
only lose itself in thee; / Dwell thou for ever in my heart,
and there, / Lord, let me sup with thee; sup thou with me.